

訳者あとがき——正しい文脈理解のために

聖書を正しく解釈し、適用するためには、当時の文脈や言語を理解することが重要です。同様に、本書を理解し、日本の教会の文脈に適用するためには、LGBTにまつわる言語、またアメリカという文脈を知ることが重要になります。用語と文脈を知ることが、状況の異なる日本の教会と本書の橋渡しとなることを願います。

本書の目的

最初に重要な点は、本書は同性愛にまつわる聖書解釈を解決するための聖書神学の本でも、教理を体系的に記した組織神学の本でもないということです。むしろマールリン氏は、あえて聖書解釈の議論を避けています。それはこの本の執筆目的が聖書解釈を論じることでなく、「どうすればLGBTコミュニティに福音を伝えられるのか」という宣教的視点に立っているからです。また読者が伝統的な聖書解釈を知っている前提でプロゲイ聖書解釈に触れています（伝統的解釈を記した日本語文献に関しては注20参照）。そのため読み進めていく中で、聖書解釈における違和感や見解の相違を感じると思います。正直、私自身も

一部同意できないと感じる部分はありました¹。また、基本的には未信者への伝道を念頭に置いているため、クリスチャンとなった後に教会がどのように罪の問題（罪をどう考えるとしても）を扱うかという教会論的な視点も欠けていると言えるでしょう。しかし、この本は聖書解釈の教科書としてではなく、保守的な教会で育った著者が、LGBTコミュニティに福音を伝えるために奮闘した証しであり、宣教のケーススタディとして読まれるべきだと思います。それは異教の地に住み、その国の文化と言語を学び、その国の人々と福音の橋渡しを試みた宣教師の宣教報告にたとえることができるでしょう。宣教報告との違いは、LGBTコミュニティは遠くの世界に存在する人々ではなく、私たちの身の周りに実際に存在している隣人であるという点です。その点において、本書はただの宣教報告としてではなく、読者自身がLGBTコミュニティを宣教地として捉え、新しく宣教の一步を踏み出すようにとチャレンジを投げかけます。

本書の用語

本書の中で登場する用語の中でまず重要となるのが、一般的に用いられている人間の性の四つの概念です。最初の概念として、身体的性（sex）があります。それは、人間の身体的特徴による性のことを指します。二つ目に、性自認（gender identity）の概念です。これは

身体的性にかかわらず、自分自身の性別をどう認識しているかということです。三つ目に、性表現 (gender expression) という概念があります。これは自分がどの性として振る舞うかということの意味します。最後は、性的指向性 (sexual orientation) という概念です。これは性的に惹かれる対象を意味します。これらの四つの性の概念の組み合わせによって、個人のセクシュアリティの定義が決まります。

まず身体的性と性自認が一致しており、性的指向性がそれとは逆の性である場合はヘテロセクシャル (またはストレート) と呼ばれます。これは同性愛 (homosexuality) の対義語です。ヘテロセクシャル以外の分類は、おもにLGBTという表現が用いられます。それぞれ、L (レズビアン)、G (ゲイ)、B (バイセクシュアル⇨両性愛者)、T (トランスジェンダー⇨性別越境者) の略です。トランスジェンダーは身体的性と性自認が一致していない場合を意味します (混合されがちですが、トランスジェンダー⇨同性愛ではありません)。⁵ 注意が必要なのは、上記における「同性愛・異性愛」の分類は身体的性ではなく、性自認と性的指向性によって決まるという点です。例えば身体的性は男性でも性自認が女性の場合、その人が女性に惹かれる場合はレズビアンということになります。さらに、近年はQ (クエスショニング⇨結論を出していない) やA (アセクシャル⇨好きになる性を持たない) などの様々なセクシュアリティを加えて、LGBTQ+またはSOGI (Sexual Orientation

and Gender Identity) と呼ばれています。以上のように「同性愛」という一言では表せないほど、性概念は多岐にわたっていることが分かります。私たちが「同性愛」について語る⁶ とき、それは何を指しているのかを明確にする必要があります。

アメリカ福音派という文脈

本書は「アメリカの福音派」という文脈の中で書かれています。LGBTをめぐるアメリカ社会は大きく分裂しています。——多数派だった教会が、社会的弱者であるLGBTコミュニティを長らく抑圧してきました。そして今、彼らは不当な抑圧に対して立ち上がった⁷。このように、メディアではLGBTコミュニティと教会の対立構造を公民権運動の再来であるかのように描いています。また教会内でも、いわゆる主流派教会と福音派教会の二極化はますます広がっていますが、その最大の課題はLGBTにまつわる教会の対応です。著名な牧師であり著者であるユージン・ピーターソン氏が、同性婚に関して同情的なコメントをしたとたん、彼がリベラルになったというニュースが全米を駆け巡ったことは二極化を示すよい例でしょう。⁸ それは単に神学の問題としてではなく、アメリカの若者たちにとってリアルな課題です。「同性婚に反対か賛成か」というような議論は、中高生や大学生の間で日常に行われ、その返答によってレットテルが貼られていきます。保守的な教会は伝統的な聖書観

を重んじ、同性婚に関して明確に反対の立場を取っています。一方で、「同性愛者は処刑されるべき」というメッセージを語る牧師の姿や、カミングアウトしたことで家族から勘当され、自死に至った高校生の実例などが報道され、福音派は非寛容な差別主義者であるというイメージが広がっています。LGBTは、もはや人権問題として認識されているのです。

激しい怒りの応酬とも言えるような二極化したアメリカの状況の中、二〇〇九年に本書は執筆されました。保守的な福音派出身のマーリン氏は、マーリン財団を設立し、LGBTのコミュニティに福音を伝える働きを続け、二つのコミュニティの架け橋となるべくアメリカ中で講演をし注目を浴びました。本書はInterVarsity Pressから出版され、Zondervan社からはDVDが発売されました。どちらも保守的なキリスト教出版社として知られています。当時、保守的な立場からLGBTコミュニティへの橋渡しを試みた書籍は非常に珍しく、本書は年間ベストセラーとなり、賞を多数受賞しました。また二〇〇九年のアーバナ学生宣教会では、同テーマで分科会を担当されています。そしてマーリン氏は、FAITH紙により「今後二十五年間で最も影響力のあるクリスチャン」の一人に選出されました。

それだけ大きな反響があった本書ですが、同時に様々な批判を受けた本でもあります。主流派の同性愛容認派からはマーリン氏が羊の皮をかぶった**差別主義者であると批判され**、福音派からは聖書解釈において**リベラルであると批判されました**。橋は双方から踏まれる、と

本人が本書の中で述べているとおりの評価を彼自身が受けました。マーリン氏に直接連絡を取って聞くと、「当時はプロゲイ（訳注：ゲイ賛成・尊重）の立場に立つか、LGBTの人々をキリスト教から一切排除するか、両極端の選択肢しかありませんでした。私はそのどちらにも立ちたくなかったのですが、その立場は当時許されませんでした」と回想されています。しかし、**彼の働きが福音派教会とLGBTコミュニティの対話に向けて一石を投じたことは評価されるべきでしょう**¹⁰。何より、彼の働きを通して信仰に導かれたLGBTコミュニティの人々が大勢いることは忘れてはならない点だと思えます。

現代の状況

本書が執筆されてから十二年の間で、LGBTをめぐるアメリカの状況はさらに大きく変化しています。本書にも登場する同性愛の矯正（変化）を推奨することで有名だった**アメリカ最大の元ゲイ（Ex-Gay）団体**¹¹ Exodus Internationalの代表が、二〇一二年に同団体の掲げる「変化は可能である」というスローガンは間違っていたと謝罪し、**翌年二〇一三年に団体が解散するという出来事が大きな衝撃とともに報道されました**¹²。教会の二極化もさらに進んでいます。主流派の教会は同性婚を認める方向に進んでいます。合衆国長老教会（PCUSA）では二〇一四年に同性婚が認められ、**同性婚を公に容認した世界最大の教団の一つと**

なりました。¹³ 直近では合同メソジスト教団が同性婚をめぐり二つの教団に分裂をする可能性が高まっています。¹⁴ 一方福音派の著名な指導者たちは、同性婚を容認する社会的な流れに対し、二〇一七年にナッシュビル宣言を採決。¹⁵ これは「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」と同じく、支持する事柄と反対する事柄を対比する構造で記されています。学生宣教の現場ではアメリカの学生宣教師団体 *InterVarsity* が、二〇一六年に同性婚に関する団体の見解に反する職員に自主退職を勧める処置を行い、メディアで大きく取り上げられました。¹⁷

また近年、LGBTコミュニティとの橋渡しを試みる書籍は福音派の出版社から次々出版されています。自身の男性への性的指向で葛藤した経験を持つ英国国教会司祭のサム・オルベリー氏が記した『Is God Anti Gay? (神はゲイが嫌いなのか)』や、麻薬の売人として獄中でHIV宣告をされたことをきっかけに改心し、現在ムーディ聖書学院で新約聖書を教えているクリストファー・ユアン氏による『Giving Voice to the Voiceless (声なき者たちの声)』などです。また、ホイートン大学心理学教授マーク・ヤーハウス氏による『Understanding Sexual Identity: Resource for Youth Ministry (セクシユアルアイデンティティを理解する——青年宣教のための資料)』などが福音派の神学校教育で用いられるようになってきています。¹⁸ マーリン氏自身も、本書で記されているLGBTコミュニティと信仰に関する調査を完成させ、『*Us Versus Us*』を二〇一四年に出版しています。¹⁹ 実はその後マーリン財団は解散し、彼

個人は学びを深めるために英国のセント・アンドリュース大学で神学博士号を取得しています。本人に問い合わせたところ、マーリン財団を閉じたのは資金面や理念上の理由ではなく、橋渡しと和解の働きをLGBTという文脈だけでなく、より広い文脈で実践する召しを受け取ったからということでした。現在マーリン氏は、ISISに占領されていた地域などで政府やNGOと協力しながら、和解と橋渡しの働きに従事されているとのことでした。

新しい対話と宣教のきっかけとして

現状では日本語で読める同性愛とキリスト教に関する書籍は、ほとんどがプロゲイ神学の視点で記されたものです。²⁰ このテーマに関しては、福音的な教会の中ではいまだにタブー視され、教会の中で語られることが少ないのが現状ではないでしょうか。しかし私自身、学生宣教の現場で実感したのが、学生にとってLGBTの問題は日に日に身近な問題となっているということです。あるキャンプで講師の先生へのQ&Aを募集した際には、LGBT関連の質問が一番多かったことが現状を物語っています。福音的な、聖書的な立場に立ちつつ、真摯にLGBTコミュニティについて学び、宣教地として、愛し仕えるべき隣人として捉えること、そのために教会として様々な面で備えていくことが必要だと痛感しています。

日本の福音派教会の現状には課題と同時に希望もあります。クリスチャン・コミュニティ

対LGBTコミュニティという社会的対立構造に陥ってしまったっているアメリカとは異なり、日本にはまだこの対立構造は明確には存在していません。日本の場合、教会自体が社会的なマイノリティです。それゆえに欧米社会とは異なる、対立的ではない宣教的なアプローチを模索する道は開かれているのではないかと思います。本書は、あくまで対話の糸口にすぎません。LGBTコミュニティに伝道した後の教会でのフォーロー、傷ついた当事者たちへのアプローチ、青年伝道における扱い方、聖書解釈の検証など様々な課題が山積みです。今後、

この分野でより多くの書籍が翻訳され、また日本の文脈で新たな書籍が執筆され、教会内で学びがさらに広がっていくことを期待します。本書が福音的な教会がLGBTコミュニティを宣教地として捉えるきっかけとなり、一人でも多くの人にイエス・キリストの福音が伝わるようにと願います。

翻訳に際して多くの方々の助言と助けをいただきました。特にこのテーマに関して多くの助言を下された水谷潔先生、いのちのことば社の根田祥一さん、セント・アンドリューズで共に学んだマーリン氏を紹介してくださった赤城海宣教師には大変お世話になりました。この場を借りて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

二〇二〇年 二月

岡谷和作

《訳者あとがき》注

- 1 本書の見解や聖書解釈は私個人、私の教会、団体のものではありません。
- 2 本書の原題は Love Is an Orientation です。愛こそがクリスチャンの指向性であるべきという著者のメッセージが表れています。
- 3 教会のLGBTコミュニティに対する態度に関しては様々な見解があり、単純化はできません。しかし、教会により傷を受けた経験を語るLGBTの人々は多数存在します。
- 4 フィリップ・ヤンシー氏のように聖書観としては福音派でも政治的には左派という立場をとる福音派左派とも呼ばれる人々も存在しますが、メディアの注目を浴びることは希です。
- 5 直後にピーターソン氏は、彼自身は伝統的な立場に立っていることを補足しています。
www.washingtonpost.com/news/acts-of-faith/wp/2017/07/13/popular-author-eugene-peterson-heres-what-i-actually-think-about-gay-marriage/
- 6 BBC作成のドキュメンタリーの一部視聴可能 www.youtube.com/watch?v=uPR1Msc0y-c
<https://sojo.net/articles/christian-exorcism-leads-gay-teens-suicide>
- 7 著名なLGBT運動家☆It Gets Better Projectの有名なDan Savage はニューヨークタイムズの記事の中でマーリン財団のことを隠れた同性愛嫌悪者たちと非難。
www.nytimes.com/2013/04/14/books/review/does-jesus-really-love-me-by-jeff-chu.html
- 9 Robert Gagnon によるマーリン氏の聖書解釈に反論する論文が有名です。
www.robgagnon.net/articles/homosexMarinLoveSOrientation.pdf
- 10 例えば新約学者のスコット・マクナイトは、見解の相違が一部あることを認めつつ、彼の貢献を評価しています。 www.patheos.com/blogs/jesuscreed/2016/04/01/us-vs-us-andrew-marins-newest-study-on-lgbt/
- 11 ホモセクシュアルからヘテロセクシュアルになることをサポートする超教派団体
www.cnn.com/2013/06/20/us/exodus-international-shutdown/index.html

- 元 Exodus のメンバーを中心に Restored Hope Network として活動は継続しています。
13 www.pcusa.org/news/2015/3/17/presbyterian-church-us-approves-marriage-amendment/
14 www.cnn.com/2020/01/17/us/united-methodist-church-split-christianity/
15 cbmw.org/nashville-statement
16 日本の K G K と同じ I F E S (国際福音主義学生連盟) に所属
17 time.com/4521944/intervarsity-fellowship-gay-marriage/
18 例えばトリニティ神学校のカウンセリングの「Gender Issues」の授業では教科書のひとつとして用いられています。
19 多くの L G B T コミュニティの人々がもともととはキリスト教の背景に育ち、そのコミュニティから拒絶された経験を持っていること、さらにその中でも多くの人は信仰に戻りたいと願っていることが、膨大な調査結果を元にまとめられています。
20 ボブ・デイビーズ、ローリー・レンツェル共著の『男か女かく同性愛のカウンセリングに』は、おそらく日本語で読める唯一の保守的な立場から記された単行本です。サイカー編『キリスト教は同性愛を受け入れられるか』の中では、リチャード・ヘイズやスタントン・ジョーンズなど保守的な見解からの論文も紹介されています。

(敬称略)